

是永 紫帆

KORENAGA Shiho

戦時下における南洋のイメージ「構想画」としての大南洋展覧会壁画―

Images of the south seas during wartime: Mural paintings from *The Great South Seas Exhibition* as ‘composition painting’

美術史領域



はじめに
　終戦直後から、「戦争画」は帝国の悪しきプロパガンダであったとする評価が定着し、太平洋戦争期は長らく日本近代美術史上の断絶期とされてきた。しかし近年、展覧会や書籍において、「戦争画」だけでなく、占領地や銃後の生活を主題にした絵画や、彫刻やモニュメントまでもを含んだ「戦争美術」が積極的に取り上げられるようになり、その評価は見直されつつある。こうした流れの中で、「南洋美術協会」および同協会展と、「大南洋展覧会」は再発見された。

　南洋美術協会とは、南洋群島への渡航経験がある美術家によって結成された美術団体で、1941年から全3回の展覧会を開催した。そして第1回協会展の直後に開催された大南洋展覧会には、9名の洋画家による壁画が出品され、これには同協会員も複数参加していた。これらの壁画は現在所蔵先不明で実作品を確認することはできず、画面を詳細に観察した研究もいまだなされていない。しかし、当時発行された絵葉書からカラー図版を知ることができる。1点ずつ見てみると、大南洋各地域を表す象徴的な事物が重層的に描き込まれ、さらに「構想画」の理念を用いることで、最終的な展示空間においてより効果的に「大東亜共栄圏」の姿を伝えるものとなっていることがわかった。

　本研究では、大南洋展覧会に出品された壁画に着目し、それぞれの画面を詳細に観察、また残された史料から当時の展示状況の再現を試みる。そのうえで、戦時下において大南洋イメージを通してどのようなプロパガンダが行われたのかを明らかにする。また、壁画の中に「構想画」の理念を見出すことで、戦時下においても画家たちが純粋な造形の探究を続けていたことを解明する。

第 1 章

　第1章では、「南洋群島」「大南洋」という用語が示す地域を確認し、先行研究によって明らかにされた南洋美術協会と大南洋展覧会の概要について整理を行った。

　「南洋群島」とは、第一次世界大戦以降に日本が委任統治権を得た旧ドイツ領の各諸島を指す。そして「大南洋」とは、南洋群

島に加えて佛領印度支那、タイ、ビルマ、英領マレイ、英領ボルネオ、比律賓、豪州、などを含む地域を指す。

　南洋美術協会は1940年に南洋庁の呼びかけに応じて結成された。第1回展の出品作は風景画や風俗画が中心で、太平洋戦争開戦直前にしては緊張感に欠けるものであったが、第2回展では「南方共栄圏十五題」という画題展示が行われ、第3回展では「航空戦」や「哨戒」といった主題の壁画が出品された。この出品内容の変化には、大南洋展覧会の存在が関わっていた。

　大南洋展覧会は、南洋美術協会第1回展の直後、1941年10月に日本橋・三越本店を会場として開催された。同展覧会は、南進論が叫ばれる時局において国民の南方への関心の高まりに応えるために開催された。展示物の総数は1250点にも上り、大南洋各地域の産業や文化などについて、写真やパネル、標本、工芸品、そして背景に等身大の人形を配置したジオラマ展示などが並べられた。

第 2 章

　第2章では、南洋美術協会展および大南洋展覧会壁画制作に参加した画家のうち、特に重要と考えられる和田香苗(わだ・かなえ、1897–1977)と鶴田吾郎(つると・ごろう、1890–1969)に注目した。

　和田香苗は東京美術学校出身で、官展を中心に活動した洋画家である。香苗は1935年に南洋群島への渡航を経験しており、南洋美術協会では幹部を務めた。全3回の協会展および大南洋展覧会壁画の制作に参加している。香苗の実兄は洋画家の和田英作(わだ・えいさく、1874–1959)だが、これまでその兄弟関係と絵画制作が比較されることはなかった。しかし香苗の《渋沢秀雄氏像》(1914年、松戸市教育委員会蔵)と英作の《赤い燐寸》(1914年、鹿児島市立美術館蔵)を見比べると、同一の像主をそれぞれ同時に描いた肖像画であることがわかる。制作年は香苗が東京美術学校に入学する以前であり、この頃から英作の指導を受けていた可能性が示唆できる。

　鶴田吾郎は太平洋画会研究所などに学んだ洋画家である。《神兵バレンバンに降下

す》(1942年、東京国立近代美術館無期限貸与)を描くなど従軍画家として活躍し、陸軍美術協会の設立においても中心的な役割を果たした。また、1937年より日本壁画会に参加しており、これが大南洋展覧会壁画の制作に繋がったものと思われる。作戦記録画の中で最もよく知られる上記作品を制作したものの、回顧展が開催される機会は少なく、見直しが必要な画家のひとりであろう。

第 3 章

　第3章ではまず「戦争画」の分類を整理し、日中戦争開戦以降に頻繁に開催されるようになった戦争美術展の内容の変遷を確認した。そのうえで、南洋美術協会展と大南洋展覧会がどのような位置づけになるのかを考察した。

　戦争美術展は、日中戦争開戦の翌年、1938年以降に本格的に開催されるようになる。日中戦争下では、その戦争目的の曖昧さゆえに、たとえ戦闘シーンであっても、兵士が流血する様や死体などは描かれなという特徴があった。しかし1941年12月の太平洋戦争開戦によって状況は一変する。太平洋戦争には、欧米列強からアジアを解放するという大義名分があった。これにより敵の姿が明確になり、激しい戦闘場面が描写されるようになった。

　南洋美術協会展は、大南洋展覧会を経てより政治的な性格を強めたと指摘されているが、両展覧会の直後に太平洋戦争が勃発したことも関連しているだろう。そのように同時代の「戦争画」が過激になってゆく中でも協会展では第3回展まで兵士が傷つき血を流して倒れるような戦闘場面を描いた作品は出品されなかった。その理由は、同協会の目的は南進論と同じくあくまで「共栄」であり、その性格を貫いたためであった。

第 4 章

　第4章では、大南洋展覧会壁画の制作状況を確認し、展示された環境の再現を試みた。そして壁画を詳細に観察し、「構想画」の理念が組み込まれている可能性について考察した。

　壁画1点の大きさは、縦約2メートル70セ

ンチ、横約5メートル50センチという大画面であった。9点の壁画は会場となった日本橋・三越本店の吹き抜けを利用して、中央ホールを取り囲むように展示された。壁画の制作者と題名は次のとおりである。

　布施信太郎《南洋群島ヤップ島》/ 安田豊《佛領印度支那》/ 伊藤清永《泰国》/ 藤本東一良《ビルマ》/ 五味清吉《英領馬來》/ 山崎坤象《英領北ボルネオ》/ 秋保正三《蘭領印度》/ 和田香苗《比律賓群島》/ 鶴田吾郎《濠洲》

　これらの壁画は、各地域の象徴的な風物をモニタージュした作品と、实景に基づいて構成された作品とに分けられる。前者の作品には民族衣装をまとった人物を中心に、現地特有の遺跡や動物を組み合わせた場面が描かれている。後者の作品でも中心に描かれるのは人物であり、日常生活の様子や特色のある産業に従事する人々が描かれた。また、同展覧会で行われたパネルやジオラマ展示と共通点が見られる作品もあった。

　これらの壁画は、人物像を中心とした大画面の壁画であること、様々なモチーフを組み合わせ画家の想像によって構成された場面であること、興行きの制限された背景と前景に人物を配置する平行主義が見られることから、「構想画」の要素を持っていると考えられる。また「構想画」の要件として、画家の思想が画面に込められていることが重要となるが、これらの壁画には南洋への関心を昂揚させるという展覧会主催者の目的に加え、国家が標榜した「大東亜共栄圏」の思想までもが組み込まれている。さらに、同一の空間を取り囲むように壁画を展示し、鑑賞者はそれを移動しながら見ることによって、思想を持つ一つの壁画としての姿がより鮮明となった。それは、アジア全体が欧米の支配から脱し、日本を中心とした共栄の道を築いていくという国が主張した大義名分であり、そして理想的な「大東亜共栄圏」の姿であった。

おわりに

　太平洋戦争下において、欧米列強に対し一丸となった理想の「大東亜共栄圏」の姿を示すため、洋画家たちは南洋各地域の象徴的な風物を壁画に表現した。さらに「構想画」

の理念を用いて展覧会場となった百貨店のホールを取り囲むような展示を行い、鑑賞者も共栄圏の一員であることを自覚させるための仕掛けを作り上げた。一方、壁画を制作した画家たちが「構想画」を実現しようとしたという直接的な言及は確認できていない。そのことは逆説的に、画家たちの意識下に「構想画」があったことを示すものともいえる。壁画制作に参加した画家たちの多くが東京美術学校や太平洋画会研究所で学び、官展ア

カデミズムを経験していたことを背景として、大東亜共栄圏の思想と大衆文化の狭間で原点回帰のように壁画芸術を突き詰めようとした画家たちの奮闘の結果、戦時下に「構想画」の理念が再現されたとも解釈できよう。

　以上、本研究では、従来の研究で断絶期とされてきた戦時下の美術においても、画家たちは戦争に関連した作品を制作する中でも、造形的秩序と表現内容を併せ持った「構想画」を追究していたと結論づけた。



図1　大南洋展覧会　壁画陳列会場（日本橋・三越本店）の一部
【図版出典：絵葉書『大南洋展覧会　壁画集（十枚組）』南洋団体連合会〕筆者所蔵



図2　和田香苗《比律賓群島》1941年　大南洋展覧会壁画9点のうち1点　おそらく270×550cm　所在不明
【図版出典：絵葉書『大南洋展覧会　壁画集（十枚組）』南洋団体連合会〕筆者所蔵